

Newsletter Citizen's eyes vol.41

2024 年 9 月 29 日発行／ジャーナリズムを考える市民連絡会とやま

連絡先 ☎ 090-4680-6336 <https://civic-journalism.wixsite.com/mysite>

1876（明治9）年6月28日東京・浅草寺「新聞供養大施餓鬼会」（法要）

自由民権運動が始まり政府批判が活発化する中で、1875 年新聞紙条例や、讒謗律など罰則規定を盛り込んだ本格的な言論抑圧制度が作られ、多くの筆禍事件が起きた。当法要は、その制度制定 1 周年を期して、弾圧を受け獄中にある新聞記者への激励と廃刊された新聞を弔い、政府への抗議として行われた。当時の多くの言論人が、思いのほか、言論の自由について考え、連帯と抵抗を示していたことを知り、驚きとともに、近代日本新聞・言論史への関心がより高まった。（お）

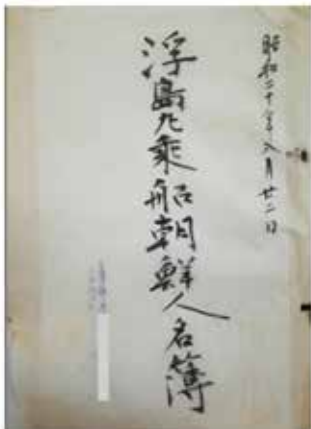
参考：「明治前半期における『言論の自由』観」（高木強著）

「浮島丸乗船朝鮮人名簿」公開と日・韓メディアの動き

浮島丸殉難 79 周年追悼集会に参加して

堀江節子

今年 3 月、ジャーナリストの布施祐仁さんの情報公開請求によって、これまで日本政府が「存在しない」としてきた「浮島丸乗船朝鮮人名簿」が厚生労働省に保管されていたことが明らかになった。現在、韓国では「浮島丸事件」が再び注目を浴びている。



共同通信 6 月 2 日

<地元舞鶴での追悼集会>

日本の敗戦から間もない 1945 年 8 月 24 日、朝鮮人軍属や労働者とその家族数千人を乗せて釜山港に向かう旧日本海軍特設輸送艦「浮島丸」が京都府の舞鶴港で米軍が敷設した機雷に触れて爆沈、500 人以上が死亡した。事件が起きて 79 年になるが、本年も舞鶴港の浮島丸殉難者追悼公園（舞鶴市下佐波賀）で追悼集会があった。初めて参加した。



沖にある島との中間地点で沈没した 筆者撮影

船が沈んだ海を見ながら、「殉難者追悼の碑」の前で主催者から話を聞いた。私が見たときは花輪のほとんどが海に献花され、京都府知事、舞鶴市長、民団、総連の花輪だけが残されていたが、報道写真を見るとかなりの数の花輪があったようだ。参加者は 250 人と言っていた。今年 1 月に「群馬の森朝鮮人



浮島丸殉難者追悼儀 筆者撮影

追悼碑」が右派の執拗な攻撃で県が破壊・撤去したが、ここは様相がまったく違った。追悼碑は地元の中学校の美術教師だった余江勝彦元浮島丸殉難者を追悼する会会長が製作した。説明した元教師も、「自分は中学生のとき手伝った」と話した。当時、在日の人たちから寄付の申し出があったが、「朝鮮を植民地支配し、戦争のために強制動員しなければ事故は起きていなかった。そうした加害の歴史を記憶するために建立するのだから」と断ったそうだ。

<謎が多い浮島丸の爆沈>

浮島丸が沈没したのは、下佐波賀沖数百メートルの水深 10 数メートルの地点だった。住民は小舟を出し、また救難船も来て救助に当たったが、船底にいた人たちは逃げ出せなかった。1950 年に船の半分が引き上げられたときにも遺骨が見つかり、今も海底に遺骨が残るという。

いまだ解明されていないことが数多くある。①日本・米国は機雷による爆沈と記録するが、船員が自爆させたとの証言もある。②青森県大湊を出て釜山に向かって

いた船が目的地を変更して舞鶴湾に入ったのはなぜか。③日本政府は、乗船者は朝鮮人 3735 人、乗員 255 人、死者は乗客 524 人、乗員 25 人と発表、生存者は 3 千人余りだった。便乗者がいて、乗船者数が分からないのに、なぜ死者数を確定し、死没者名簿を作成できたのか。④浮島丸が青森県大湊を出たのは敗戦の一週間後。そんなに急ぐ必要があったのか。⑤ 9 月 2 日以前の事故で、日本政府は朝鮮人犠牲者に補償しようと模索していたが、様々な事情で立ち消えになった。⑥ 1992 年、韓国人生存者や遺族は日本政府に真相究明と謝罪、補償を求めて国賠請求訴訟を起こした。京都地裁は 2001 年、安全配慮義務違反を認め、国に一部賠償を命じる判決を出した二審で逆転敗訴し、2004 年最高裁で敗訴が確定した。⑥ 祐天寺に、厚労省が預託した浮島丸犠牲者の遺骨 280 人分が残る。遺骨は一つにまとめられた後人数分に分けられた分骨のために引き取りをためらう遺族もいるが、朝鮮民主主義人民共和国の遺骨が 5 人分も含めて返還への努力をすべきだ。

<日・韓国民の関心の違いとメディア>

布施さんは、「政府が『ない』と説明してきた浮島丸事件の『乗船者名簿』、やはりあった！」を 2024 年 5 月 23 日の「Note」でリリースした (<https://note.com/yujinfuse/n/n61931c383dae>)。共同通信社も、布施祐仁さんとの共同調査で明らかになった詳細な記事『浮島丸事件』がミステリー化した元凶」を配信した (<https://news.yahoo.co.jp/articles/0ea84296789b07746d3651507528e565a45ded9c/images/000>) (2024 年 6 月 2 日)。現在、乗船者名簿は 70 種もあるとされ、9 月 5 日、一部 19 冊の名簿データが韓国政府に渡され、調査が終了次第残りも提供される(北日本新聞 9 月 6 日)。

ところで、日本の新聞は、例のごとく政府発表をそのまま報じるのみだから、日本社会は他人事として認識するだけである(注)。一方、韓国では被害者の補償要求が再燃し、支持率の低い日本ひいきの大統領の動向とあわせて感心は高いようだ(ハンギョレ 9 月 6 日)。いままた、混乱の中で浮島丸に無断で乗り込んだ人数(70 人程度もしくは 200～300 人)は「6 千～8 千人」という説や「日本軍による自爆事件」との考えが再燃しているが、日本政府が早い段階で名簿を

公表していれば、韓国でこうしたことは起きず、不信感も薄らいだはずだ。

布施さんは、7 月に韓国国会議員会館内で「浮島丸事件憲法訴訟請求人代表者会議」(韓国政府が浮島丸事件の問題解決に取り組まずに放置しているのは憲法違反だとして、2020 年に憲法裁判所へ審査請求した市民グループ)の討論会に参加し、遺族と交流して「Note」に発表しているが、今後続報を書くという。

9 月 12 日の聯合ニュースによれば、かつて韓国で「対日抗争期強制動員被害調査および国外強制動員犠牲者ら支援委員会」を通じて慰労金が支給された際、浮島丸事件の犠牲者には資料がなかったため被害が認定されなかった。名簿や日本政府が在日朝鮮人連盟と行った折衝の経緯を記した文書の内容が明らかになれば被害者の再申請が行われる可能性があるとして、真相究明と日本の責任を問う声が高まっているという。また、ハンギョレ(9 月 6 日)は、退任直前の岸田首相が緊急の協議もないのに、支持率の低い現大統領に手土産として「名簿」を持ってきたと揶揄する声があると書く。日本のメディアは名簿公開等の記事を単なる出来事のように書いているが、これでは歴史否定記事とかわりない。犠牲者は強制動員された軍属や労働者とその家族であるのだから。日本の植民地主義や戦争責任を問い、事件を風化させないように促し、日本政府に対しては、資料を公開して真実を明らかにするよう求めるのがメディアの役割であろう。

浮島丸名簿 韓国に提供 日本政府

【ソウル、東京共同】1945年8月に、帰郷する朝鮮人労働者を乗せた輸送船が京都府の舞鶴港で爆発、沈没した「浮島丸事件」で、日本政府は5日、乗船者の名簿の一部を韓国へ提供した。日韓両政府が明らかにした。日本政府は乗船者名簿は長年「不存在」としていたが、今年になって日本のジャーナリストの情報公開請求に開示していた。

「浮島丸事件」では500人以上が死亡した。提供により遺族が親族らの被害を確認できる。韓国外務省によると、5日提供されたのは資料19種。残りも日本側で調査を終え次第、韓国側に提供されるという。

日本の厚生労働省によると「乗船名簿」「浮島丸乗船朝鮮人名簿」「船乗者名簿の件報告」などの文書で、死亡者524人分の名前が記載されているものもある。乗船時に作られた名簿は沈没とともに失われており、今回の名簿は旧海軍が沈没後、乗船者の勤務先などから情報を集めて作成したという。

韓国では2007年の法律で、日本による植民地時代の強制動員の被害者と認定されれば、政府が慰労金を支給。今回の名簿が被害者であることを証明する資料になり、遺族への支給につながる可能性もある。

終戦時沈没 遺族が確認へ

浮島丸(艦船研究家の福井静夫さん撮影)

(注) 政府発表をそのまま報じる記事→

《コラム》 沖縄のいま (32)

辺野古新基地の現状 ～いつできるのか？ いくらかかるのか？ 本当にできるのか？～

小原 悦子

辺野古、総事業費の 57% 支出済み 23 年度末で
政府は辺野古設計変更承認の「代執行」という異例の
事態を経て、今年 1 月、大浦湾側の工事に着手した。8
月 20 日には埋め立て予定地北側の「A 護岸」の造成工
事が着工した。

防衛局は「A 護岸」着工に先立って、大浦湾側護岸工
事の 4 件の契約を変更し、入札額から約 170 億円増額
していた。

防衛省の申請による総事業費は 9300 億円、工事が完
了し、米軍に提供するまでに 12 年かかるとしている。

到底、予定通りにいかないだろう。

防衛省は、2023 年度末までに支出した額は約 5319
億円であると明らかにした。すでに総事業費の 57% が
支出されている。新基地建設全体で必要とする土砂総量
は 2017 万 6 千立方メートルとされるが、23 年 11 月末時点
で全体の 15.76% しか投下されていない。

右略図…琉球新報八月三十一日より



安和栈橋出口ゲート前での交通死傷事故

6 月 28 日、琉球セメント安和栈橋の出口ゲート前
で交通死傷事故が起きた。栈橋出口から左折して国道
449 号線を本部（もとぶ）方面に出ようとしたダンプ
カーに警備員と抗議していた市民が轢かれた。警備員の
A さん（47）が死亡、市民 B さん（72）は重体となった。

琉球セメント安和栈橋から輸送船を使って辺野古埋め
立て用土砂の搬出が始まったのは 2018 年 12 月から。
市民はカヌーに乗って輸送船の出港を遅らせ、ダンプ
カーの出入り口（歩道の切り下げ部）では牛歩して栈橋
への土砂搬入を遅らせる活動が続けてきた。ダンプカー
の台数も日々カウントしていた。

現場では暗黙のルールもできていた。「抗議者が出入

り口の片道を歩いたら、ダンプを 1 台出す」「抗議者は
運転手に手を挙げて合図をしてから歩き始める」。

ところが、「代執行」後、防衛局は土砂搬入を急がせ、
警備員によるダンプの強引な誘導が増えていった。1 台
ずつ出すという「暗黙のルール」が破られ、危険な 2
台出しが行われ始めた。

事故後、死亡事故の原因は抗議する市民らに責任があ
るとするヘイトスピーチが繰り返された。亡くなった
警備員も、抗議していた市民も、ダンプカーの運転手も、
沖縄県民だ。政府の工事強行によって県民同士がまた分
断されていく。いたたまれない思いだ。しかし、県警に
よる事故原因の公表はいまだに行われていない。

全日本建設交運一般労働組合沖縄ダンプ協議会は、土
砂搬出の効率を優先したことが原因だとして、防衛局に
現場の安全確保を申し入れている。1 台ごとに出してい
たのに、2 台同時に出すようになったのが問題だと指摘
している。

安和栈橋から土砂搬出再開

8 月 22 日、沖縄防衛局は中止していた安和栈橋から
の土砂搬出を再開した。先立つ 15 日、防衛局は沖縄県
に対して「安全対策の実施」を要請し、その中で、抗議
活動を「民間人に対して危険・危害を及ぼす妨害行為」
と称した。認識が逆転している。

再開後は、警備員が幅広のネットを広げて、警備員に
よるバリケードで歩道の通行を制限している。8 月 22
日に搬入したダンプカーは 255 台。その後急速に増え、
9 月 11 日には 1143 台が入っている。

B27 地点の土質調査を実施

強引な工事が続くが、軟弱地盤改良の難問は残ったま
まだ。防衛省は 9 月 6 日、「B27」地点で新たにボーリ
ング調査を実施していることを認めた。設計変更申請で
は、水面下 90 ㍎まで軟弱地盤がある「B27」地点の力
学試験をせずに、周辺 3 地点での調査結果から類推し
て強度を評価していた。多くの識者が、「B27」地点のボー
リング調査の必要性を訴えてきた。やっと、実施するこ
とになったようだが、防衛省は結果の公表は予定してい
ないという。税金を投入している事業において、公表し

ないことは認められない。

それでも、「唯一の方法」なのか

実際は、いくらかかるのか、いつまでかかるのか、それ以上に本当にできるのかさえ不明だ。誰もわかっていないのだろう。

本来の目的は「沖縄の負担軽減」である。「唯一の方法」と居直って、漫然と工事を継続することは許されない。

工事を中止し、いったん立ち止まって、最初から検討し直さなければならない。有権者は、それができる政府を選ぶべきだし、メディアはそのために必要な資料をどんどん報じるべきだ。

月刊「地平」創刊

甲田 克志

8月2日午後、ぶらりと紀伊国屋書店を回遊していたら、雑誌コーナーに平積みされている見慣れない月刊誌が目に入った。「地平」8月号。これがあの「地平」か、とピーンときた。創刊の7月号は2度刷り増しをしている。ご祝儀買いも当然入っている。創刊した熊谷伸一郎はむしろ業界用語でいう「3号雑誌」と呼び捨てられないよう浮かれてはいない。昨年末、月刊「世界」がリニューアルしたので、販売部数が伸びず苦労しているのだと思っていたが、まさかその裏でこんな泥仕合があらうとは想像できなかった。期せずして、老舗伝統の「世界」に、新興の「地平」が切り入り込む構図である。やむを得ないが、不毛な競り合いにしてほしくない。

世界の編集長を更迭された熊谷伸一郎は、47歳にして退職金を投じて株式会社・地平社を立ち上げ、「地平」の創刊を決めた。2018年7月から22年9月まで編集長を務めたが、3年連続で販売部数・定期購読部数を伸ばす実績を残している。そんな自負もあり、営業局への異動は承服できなかったのだろう。出版ユニオンに加入して団交の機会を持ったが、結論が出るわけではなかった。同僚4人が脱藩して行動を共にした。「コトバは無力ではない」と語る創刊の辞の熱い思いは、「地平」の隅々までその息吹を感じさせる。

総合月刊誌のマーケットは極めて限定的であり、競合せざるを得ない。世界の現編集長・堀由貴子は手の内を知り尽くされたうえで、立ち向かわなければならない。より尖がった編集で違いを際立たせ、しかも寄稿者の奪い合いも想定される。友人のひとりは、この年齢で2冊は読みこなせないと早速、地平に切り換えた。書店の店長は、雑誌売り上げは激減しており、創刊がそのまま増収になればいいが、仕入れ返本の手間が増えるだけ、と表情を曇らせる。県立図書館の雑誌担当に聞くと、購入予算が決まっており、すぐには難しい。利用者からの要望が多ければの判断になる。資本主義の市場原理は厳しい判断を下すだろう。

波風を好まない老人の思いだが、熊谷には営業局への異動を受け入れてほしかった。恐らく岩波の屋台骨が傾いていることは間違いない。膨大な知的資産をどう生かしていくのか。地平社を立ち上げる雑草魂で、岩波の再生に賭けてもらえたら、よみがえる可能性もあるのでは、と思う。朝日新聞もそうだが、インテリが新聞を作り、ヤクザが売るということを続けている。市場から発せられる小さなサインを見落とさず、市場の持つ創造性に訴え、大きく動かしていく出版業のダイナミズムを今こそ見てみたい。

出版界の栄枯盛衰は常なること。わが青春を導いてくれた編集者をふたり挙げたい。ひとりは河出書房の坂本一亀。いわずと知れた亡き坂本龍一の父である。小田実の「何でも見てやろう」は文学より旅行記が君に向いている、この一言で決まった。高橋和巳の「非の器」も坂本の眼力が無ければ世に出ることは無かった。高橋の夭折を最後まで惜しみ、悲しんだ。もうひとりは原田奈翁雄。筑摩書房の「展望」編集長を務めたが、「人間として」は格好の人生の手引書となった。とりわけ林竹二を知り得たことはありがたかった。河出書房も筑摩書房も破産してしまうのだが、不器用なふたりはそれでも出版に拘り続ける。坂本は構想社を立ち上げ、原田は径書房を、とりわけ雑誌「ひとりから」は心温まる好企画であった。

蛇足だが、径書房は現在、原田の娘が代表をつとめ、「ちつのトリセツ」「人生最高のセックスは60歳からやってくる」を発刊している。7月6日に亡くなった原田は、どんな顔をしているだろう。

